第八回　南風語り　「のたうち回り方」の概要

四月二四日（土）　ギャラリー・ＧＡＬＡ

「結論を先送りにする」とはどういうことか。

わたしが、自意識丸出しで動き出したのは二十二歳の時であった。通っていた学校をやめたときから始まる。やめたはいいが、することがない。ありあまる体力がジッとさせてはくれないから、動くしかない。当座は動きながら、何かを捜すことにした。「文字から一番遠い人間でありたい」という欲も同時に生まれてきた。知育から自らを解放することで、思わぬ何かが手に入るのではないかという計算が働いたのである。

「自分は、今、何をしたいのか？」を問うてみるが、解答が出ようはずがない。それでも、捜すことをやめない。何も見つからないなら、少なくとも、「これこれは自分には不向きである」という判断をしながら動くしかない。消去法で、ひとつひとつを消していったなら、最後に何かひとつ残るはずだ。そのひとつが自分にふさわしい何かなのかも知れない、と期待した。

消去法の対象は果てしがない。箸の上げ下ろしから始まって、自分の歩き方までも見逃さない。そんな些末なことをくり返すのだが、時間をかければ最後のひとつが見つかる保障は何もない。

そうした日々の中から生まれた呪文が、「結論は先送りにしろ！」であった。「結論はないかもしれない」という呪文は思いつかない。「先送り」を実行するとなると、たえず、宙ぶらりんの中に自分を置くことになり、不安がつのるばかりなのだが、他の方法は思い浮かばなかった。結論を急いでしまえば、中途半端な結語が自らを縛り、その先へ自らを解放することを放棄する結果になりかねない、と恐れたからである。

「結論を先送り」する中で、南の島と出合った。そこに求めたものは、自分に欠落していると思えるもを目に見えるかたちで示してくれることだった。少なくとも、島にはそうした提示能力があると思いこんだのである。ワラをも掴みたい一心が、島を自らの”教師”に仕立て上げたといっても過言ではない。

習得するからには、小間切れの島では充たされない。対象を丸かじりにしたいという欲に駆られた。島を丸かじりにするとは、どういうことかというと、島の暮らしのあらゆるものを、自らの血肉としようという欲である。その始めは猿真似からであったが、血肉化の対象となるものの意味をいちいち問わなかった。経験・記憶を豊富にすることが第一であり、意味づけ自体が結論を得る行為かも知れない、と勘ぐったのである。早まった結論づけは、百害ありて一利なし、である。

判断をくださいないまま、判断材料ばかりを山積みしているようなものだった。そんなことを十年近く続けたころに、思わぬ欲が生まれてきた。「丸かじり」を続ける中で、「記録する者」としての自覚が芽を出してきたのである。これは予想だにしなかったことだった。「文字から一番遠い人間」を目ざしていたはずなのに、文字に寄り添っていったのだから、これは一体どうなっているのだ、と自らを笑った。

記録の対象は暮らしの全てであった。まず、手がけたのが、歴代の総代が預かる島の「金銭入出帳」の復刻であった。次には、島内で毎日行われている有線放送の速記録を作ることであった。

その他にも次々と「丸かじり」作業を続けたのだが、どの作業においても、解説や評論の類を避けることを心がけた。いまだに、「結論は先送りに」の呪文が生きていたのだ。が、三十年、四十年が経つと、のど元に乾きを覚え始めた。呪文を放棄したわけではないが、個々の経験や記憶には、共通した法則のようなものがあるような直観が働き始めたのである。

いくつもの法則が脳裏に浮かんでくる。そのひとつに、「うつる」というコトバがあった。島に一回線だけ通じていた電話回線は、初期には海底ケーブルで鹿児島本土と繋がっていた。天候の加減で雑音が多かったり少なかったりする。凪の日の通話を終えた島民は、「きょうは、良(よ)ううつっちょったなあ」と満足げである。「良く聴き取れた」と言うのだった。この「うつる」は、幅広く使われる。漢字に当てはめるとどうなるのかが気になった。「移る」、「映る」、「写る」、あるいは、「遷る」が考えられる。『古事記』には、「顕る」のコトバがある。「目に前にありありと神さまが顕れる」意味で使われているが、島でもそれに近い使われ方をしている。そのことは前回・三月の「南風語り」で述べた。

また、「ナマ」というコトバも、あるいは、「ダブツ」や「シラ」といコトバの意味も、同じように、共通項を持っているのだった。コトバだけではない。島の職制ひとつにしても、荒海に囲まれた島嶼に共通する知恵の結晶であることが分かってきた。具体的には「南風語り」の当日お話しするが、島は"恩義"の塊であり、その塊は"暴力"でもあるのだった。トロッキーのコトバである、「国家は暴力の上に成り立っている」のミニチュア版がそこにはある。

わたしにとって、ことの意味を究明しようとするのは、もはや止められない欲求となっていった。すべての事象・できごとは互いに結びついているのだし、ひとつを他から切り離すことは意味がない。細かく切り刻むのではなく、全部を一度に学ぶことは、楽しくもあり、容易でもある。身近な易しいことがらこそ、多くのヒントを含んでいるのであり、どんなに精緻な推測や理屈よりも、確かな足固めができていなければ、砂上楼閣を築くに等しい。

先にも触れたが、「結論の先送り」は、宙ぶらりんな状態であり、よそ目には、遊んでい

るように見える。この「遊び」、つまり精神の浮遊こそが、何かを創出する原動力となりえるのだ、とわたしは思っている。ただし、我知らず直観が働いて、「すわ！鎌倉」となれば、究明作業に飛びついていける構えが、休みなく用意されていることが肝心である。

目的が貴重であればあるほど、手段を大切にしなければならないが、渦中にあっては、何が目的なのか、何が手段なのか、フッと目の前から消えてしまうことがある。その直前に襲ってきた事実の重みに耐えかねてである。そんな事態に陥れば、中断された目的・手段の再確認を迫られる。

手段が、わたしの場合はタビ（＝移動）から始まったのだが、大きなくくりにくるまれてしまうと、行く先の不透明さがもたらす不安から解放される。その解放が、渡り鳥が一時羽を休める止まり木としての役割にとどまっている内はいいのだが、ひたすら不安解消材として期待するなら、動き回っていることは、逃げ回っているにすぎない。そうなれば、タビが目的探しの手段ではなくなる。目的が崇高であるならば、手段は選ばなければならない。

わたしは移動（＝タビ）の果てに、島で暮らすことになったのだが、暮らすこと自体が目的にはならなかった。かといって、暮らしが手段であったかというと、そうも言えない。暮らすことだけで充たされていた時期もあったからである。その点が、奥地には入って行く文化人類学者や民俗学者とは違っている。「末は大臣か対象か」というのと、全く同じ意識で、「島の青年になる」ことを夢想していたのだから。

わたしは、基礎知識を積んだ学者ではないから、知識の不十分さを充分に心得ている。だから、自らの知性では充分に直観できないと思えるものに出合ったならば、探究はそこで停止することにしている。それに続く他のものを検討するのは、徒労である。それ以上は、才に恵まれた人に任すのが良い。

既知であるとか、未知であるとかは度外視して、個々の事象の相互のつながりを、真の道順を経て直観するのは楽しことである。

メモ：
四月二十四日の「南風語り」は午後三時からです。会場は、ギャラリー・ＧＡＬＡ。東京の小田急電鉄の梅ヶ丘駅前。六時から、駅前のやきとり屋で交流会がもたれる。話なんどはどうでもいいや、とうい御仁は、やきとり屋へ直行していただきたい。

ギャラリー・ＧＡＬＡ　　電話　０３―３４３９―３３６４
やきとり屋・備長扇屋　　電話　０３―５７９９―３４５６